

禅林寺 1（初期）

863年に設立されて以来、禅林寺はさまざまな佛教宗派の勸学院であり、多くの傑出した僧達がここで修行した。寺院の歴史は大きく3つの期間に分けることができる。初期は、853年に山荘を購入した時から、お寺の名前にもなった永観律師の到着までの約220年に及ぶ。この間、寺院は真言密教の寺院であり、禅林寺として知られていた。

禅林寺の敷地はもともと、有力貴族藤原氏の一人であった藤原関雄（ふじわらのせきお）(805-853)の山荘であった。多くの藤原氏が官僚だったが、関雄は偉大な歌人であり、文人でもあった。関雄は落ち着いて和歌が作れる静かな山での生活を好み、「東山進士（ひがしやましんし）」と呼ばれた。関雄の隠れ家は人里に離れているものの、それでいて京の都に近く、佛教寺院にとって理想的な場所であった。853年に関雄が亡くなったとき、進取の気鋭に満ちた真紹僧都（797～873）が関雄の空き家を新しい寺院へかえようとした。

真紹僧都は不動産自体の購入をはじめ、様々な困難に直面した。僧侶は普通、自分の財産やお金を所有しておらず、後援者と信者の寄付で生計をたてている。真紹僧都は関雄の山荘を購入するための資金を用意できた後も、新しい寺院を運営するための日々の資金が必要であった。平安時代（794-1185）には、通常、皇室の支持によって国の寺院（官寺）が建設され、また規制されていた。この支援を受けて禅林寺を開院するためには、政府の認可を得る必要があった。

ありがたいことに、真紹僧都は皇室の政府筋と親密だった。真紹僧都は、真言密教の創始者である空海（774-835）の弟子であり、空海は真言宗の本山である高野山を含むいくつかの同宗派寺院運営の影の原動力であった。これらの足跡をたどると、真紹僧都はすでに観心寺（現在の大阪にある）の創立を指揮していたこともあり、真紹僧都と空海は都で知られる存在であった。この関係を利用して山荘の購入を手配することができた。

通常、新しい寺院の創立には厳格な法律があったが、真紹僧都には政府の許可を得るための巧妙な計画があった：最初に真紹僧都は観心寺で五体の荘厳な佛像（五智如来）の製作にとりかかった。3年後、佛像が完成したとき、真紹僧都は皇室にどこかに佛像を安置したいと願った。佛像はたくさんの人々にとって魅力あるものだということは間違いなかったが、観心寺は京から遠く離れた山の奥深くにあるので、佛像を安置するのはもったいないように思えた。真紹僧都は、藤原関雄の別荘の跡地こそ五智如来像を安置するのに理想的な場所であると提案した。863年、清和天皇（850～881）は、真紹がその場所に寺院を設立することに同意したのである。